

『榻嶋暁筆』における『法華経』重視の姿勢

—「本門」をめぐる—

小 椋 愛 子

一、はじめに

前稿^①で、『榻嶋暁筆』^②巻一を中心に、その論理展開の方法を考察した。巻一の各説話が仏教以外の諸説を取り込む形で、末尾を仏教で統括する。たとえば、標題の事柄を、諸宗、神道・道教・仏教の説を形態上、並列の形で列挙し、説明するが、末尾の仏教の説で、列挙した他宗の思想を全て仏教が内包することを示し、仏教の優位性を強調する。そして、とりわけ『法華経』、その中の「法花本門」の思想をもって結論として指摘した。宗教間では、仏教を優位とし、仏教の宗派の中では、小乗に対して大乘が、とりわけ『法華経』、その中の「法花本門」の思想を重視しているのである。また、その方法が、巻一の説話配列と相関していることを確認し、巻二、三の、一見、不規則な説話配列も仏教で統括することを示唆した。

『法華経』は、「本迹二門」といわれ、天台智顛は、『法華経』二十

八品のうち、前半十四品を、「迹門」とする。「迹門」は、仏陀伽耶で、悟りを開いた歴史上の釈尊が、四十余年間の教化の本意をうち明ける内容で、全ての人に仏の知見を開き示して悟らせる内容となる。また、「涌出品」以後の十四品を「本門」とし、ここでは、歴史上の釈尊が、実は久遠の昔に成道した仏で、久遠の化導を及ぼしてきた仏であることを打ち明ける。真の仏とは、久遠の昔、成道したものととして、釈尊が「久遠実成」であることを明らかにする部分である。この、「本迹二門」の構想を持つ『法華経』は、他の経とは、格段に違ふとする。「本門」がなければ、「迹門」の説はなく、また、「迹門」によって、「本門」が導かれるため、二門に、優劣はないとする^③。

但し、『榻嶋暁筆』巻一では、第一「戲実」の「ねもなき物」の例で

又法花経迹門の二乗成仏もねはなかるべし。

と「迹門」を例に挙げ、第九「教起」で

仏になる道はおほからず。只法花本門にかぎれり。

(傍線筆者・以下同)

と暗に「本門」の優位性を強調する。『法華経』の中でも、「本門」を重視する。

仏教で統括する意図は、『楊鳴暁筆』全体にある。本稿は、『法華経』、その中の「法花本門」重視の姿勢が『楊鳴暁筆』全体に及ぶのかを検討し、全体を概観することを目的とする。さらに、仏教で統括する論理展開との相関を考察する。

二、各巻における『法華経』重視について

巻一では仏教で統括しながら、とりわけ、『法華経』、中でも「法

花本門」の思想をもって結論としているのだが、『楊鳴暁筆』全体で『法華経』、その中の「法花本門」等の語がどのくらい使用されているのか。試みに、巻一をも含めて『法華経』、その中の「本門」、「本門」思想の論拠となる「久遠実成」の語を中心に、『法華経』に関する語を巻ごとに表した。それが次の「表一」である。

凡例

① 『法華経』の中の「本門」に関係する語を挙げた。

② 『法華経』の表記は本文に従った。但し、同巻で、「華」、「花」と表記が分かれる場合は括弧書きで示すが、一つの語として扱った。

③ 「此経」、「今経」などは、明らかに『法華経』とわかる場合のみ数に入れた。但し、どちらとも判別が付かないものが数例あり、それを括弧で括った。

〔表一〕各巻ごとの『法華経』に関する語

巻 (表題)	法華経、法花本門などの語 (鍵語)	総数
巻一	法花経 3・爾前法花 1・法花経迹門 1・此経 3・法花本門の心 4・本門の心 1・実大本門の心 1・本門の妙名 1・法花本門 1	16
巻二	法花経 1・此経 1・法花と申御法 1・久遠正覚 1	4
巻三	法華(花)経 2・此法門 1・法華開顕 1	4
巻四 (相論 上)	法華(花)経 2・法花大乘の心 1・法華の本迹 1・(迹門ヲ以テ)本門 1・此経 1・(此経) 1	6 (7)
巻五 (相論 下)	法華三昧 1・法華止観 1・(妙法) 1	2 (3)

卷六 (論宗 上)	法花同聞 1	1
卷七 (論宗 中)	法花本迹の浅深 1・法花伝 1	2
卷八 (論宗 下)	本迹の浅深 1・法花 1・法花経 1・止観法花 1	4
卷九 (似類 上)	法花自証 1・法花経 3・法華本門の心 1・法花 1・此経 1・法花四要品 1・普門品 1・法華八句の文 1・此文 1・此八句の文 1・(妙法 1)	12 (13)
卷十 (似類 下)	法華同聞 1	1
卷十一 (知識)	法華信受 1・此御経 1・法華(花)経 3・此宗 2・法華 1・法華等 1	9
卷十二 (因果)	(妙法 1)	(1)
卷十三 (怨念)	なし	0
卷十四 (転変)	(止観行者 1)・法花 1	1 (2)
卷十五 (食事)	久遠実成 1・法花問答 1・此妙音 1・此法味 1・法華八講 1・法花 1・法華真実の妙文 1・今経 1・法花本門 1	9
卷十六 (靈剣)	なし	0
卷十七 (珠玉)	法華の功 1・法花経 (の悟) 1	2
卷十八 (鏡・楽器)	久遠実成 1・本門 1・法華(花) 清浄 2・此経 1	5
卷十九 (辞分・仏語)	法華 3・法華経 6・法華一経 1・法華能結 1・本門久成 1・其経 1・(其経の言い換えとして) 無上の法 1・深奥の法 1・正法 1・妙法 1 / 本門 1・此御経 1	19
卷二十 (同名、異名、未明)	法華(花)経 3・法華迹門 1・本門 1・本迹の浅深 1・法花本門の心 1・法華本門 1・是経 1・今経 1・(爾前迹門の浄土)の対義語として) 常住本有の土 1・「法花経」の異名として無量義経 1・最勝修多羅 1・大方広 1・教菩薩法 1・仏所讚念 1・一切諸仏秘密法 1・一切仏藏 1・一切諸仏蜜所 1・能所一切諸仏 1・一切諸仏道場 1・一切諸仏転法輪 1・一切諸仏堅固舍利 1・一切諸仏大方便 1・四説一乘経 1・第一義経 1・六妙法蓮華 1・最上法門 1	11 + 17
卷廿一 (居所)	(権迹の浄土)の対義語として) 本門本国土妙 1・法花 1・法花経 1・本妙 1・(爾前迹門に説ところの浄土)の対義語として) 常住不滅の本土 (本時寂光本国土)とも) 1	5

卷二十一(草木付香之類)	法花寺 1・法華寺伝 1・法華伝 1・(小権迹)の対として) 本法 1・法華經 4・法華 1・本門の心 1	10
卷二十三(雜)	法華寺 2・法華の本因本果 1・本門 2・法華大乘 1・迹門兩門 1・此經 1(1)・権実迹本 1・法華無上の妙名 1・久遠常住 1・法花經 1・法花一乘 1	13(14)

この表から、巻により、差はあるが、『揚鳴暁筆』全体に『法華經』に関する語が使用されていることがわかる。

三、卷二との偏りと、全体の傾向

『法華經』に関する語の使用頻度は各巻ごとに異なる。しかし、語の使用が少ない巻にも、『法華經』、その中の「本門」への強い関心が伺える。まず、巻六、七、八を検討する。巻六、七、八は「論宗」の表題を付す巻で、巻六が天竺、巻七が震旦、巻八が日本の記述である。論宗の名の通り、各説話は宗教間で優劣を競う問答の形をとる。巻六は、「婆羅門教」対「仏教」、「外道」対「僧」の対立で互いに論争をする問答形式で、いずれも、仏教が優れているとする。ここでは仏教内の宗派の優劣ではなく、大きな宗教間の対立の中で仏教の優位性を強調する。但し、巻の終わりに近い、第十一「無垢友論師」は、この論師は仏教を学んだが、大乘を毀謗した為に、無間地獄に墮ちた話で、小乗仏教より大乘仏教の正当性を強調する。巻七は震旦部だが、ここでも宗教間の対立で、道教、儒教に対して仏教がいかに優れているかを説く。そのため、宗派の話には及ばず、

『法華經』にも触れていない。しかし、巻の末尾に

右震旦ノ儒釈並ニ権実ノ興廢、略シテ以テ如此。シカハ有レド

モ、法花本迹ノ淺深、其沙汰無ク、又日域弘法ノ興廢左ニ可記。

と記す。震旦、天竺では「法花本迹」の興廢、変遷を記したくとも「其沙汰無ク」記せないとする。この一文を、巻の末尾に付すことで、

作者の関心が『法華經』にあったことは明らかである。また、続く

卷八は、「日域」＝「日本」で、「聖徳太子」の話から始まる。やはり、物部氏＝「神道」と、聖徳太子＝「仏教」という宗教間の対立

の体をとる。そして、このときより、
是ヨリ日本ニ仏法興ス。

とし、日本に仏法が広まったとする。続いて

然レドモ権実ノ起書は未キラクシカラズ、況ヤ本迹ノ淺深ヲヤ。

とあり、『法華經』の「本迹」を述べる段階ではないとする。この一文からも、作者は『法華經』、その中の「法花本迹」の思想に強い関心を持っていると言えよう。第二「伝教大師」は、「普ク一代聖教ヲ披閱」した中でも、「法花」を第一とすること、そして、大師が、六宗と権実の優劣を争ったときに

汝等が依教ハ法花經ニ望テ大乘ナリヤ

として、論争に勝ったとし、諸經の中で『法華經』の位置、優位性を示す。続く第三「法相与天台」では、草木成仏の論議となるが、末尾に「草木モ仏ニナルト聞トキハ心有身ハ頼母シキカナ」の和歌を引く。この和歌の典拠は、『法華經直談抄』であり、『法華經』を論拠に、天台優位とする。続く第四「山門与三井」は、『太平記』が典拠。三摩耶戒壇をめぐる叡山と三井寺の対立を記し、三井がついに、それを許されなかったことを述べる。ここで、卷八が終わり、その後の宗派の対立については記さない。これほど『法華經』に関心を示し、重視しながら、それ以後の「日蓮宗」の台頭について一切記述がないことは、興味深い。とはいえ、『法華經』に対する強い関心、重視の姿勢は、語の使用が少ない、これらの巻からも伺えることを確認した。

さらに、卷十四「転変」の巻を検討したい。卷十四は、地名、景勝、石などの名前の由来を述べる巻で、經典との結びつきは弱い。經典自体、出典として、割り注の形でも、ほとんど見られない。しかし、第六「丹後經が御崎」の説話で、「經が御崎」は、昔、文殊が童宮で説いた經がそのまま石になったものだと言明し、別記文で、「今云、妙吉祥海に入て御法を説しは、説法花の時也。」と、その時、説いた經は『法華經』であるとす。そして「彼時は色の經卷あるべからず」とし、ただ、盤石の重なった様子が、巻いた經を積んである形に似ていたため、人々がそう言ったとする。その後、

『榻嶋曉筆』における『法華經』重視の姿勢（小椋愛子）

但目連救母經にこそ在世に色のある經卷あるやうにはとかれたれど、彼經は偽經歟。

と、『目連救母經』に、「色の經」についての記述があるが、それ自体、偽經ではないかとする。別記文で、文殊が説いた經を『法華經』としていることから、本文で、「文殊大聖童宮に至り説給ひし御經」の「御經」は、『法華經』を指す。經典に、接頭語をつけ、經典自体を敬う。『法華經』に対する作者の姿勢が伺える。

『法華經』に関する語の使用例が全くないのは、卷十三の「怨念」⁴と、卷十六の「靈劍」⁵の二巻。卷十三は、「怨念」の表題が示すように、主に執着の深さ、思いの深さがもたらす災い、それに伴い、起きる不思議の話である。たとえば、橘の木を愛して執着した為、死後、蛇となった話、三井寺の頼豪が、戒壇建立を許されず、怨霊になったこと、その後、鼠となって叡山の經典を食い荒らした話、橘の実に執着し、死後、橘に付く虫となって、実を食べる話、夫婦の思いが強く、妻に先立たれた夫の思いの深さにより、亡き妻が夫に会いに来る話などである。不思議の現象、事象に重点を置く。その為、特定の經典の教えを以て解釈することは、難しかったのではないかと。とはいえ、僧であるのに執着心を示したのは「浅増し」⁶のことであるとか、高僧の言葉を引き、執着することの業の深さ、恐ろしさを述べるなど、仏教の立場で解釈しているものもある。

卷十六の「靈劍」では、冒頭、

天竺にはさして靈劍を尋るにありとも經論には見及侍らず。管

見のゆへなるべし。

とあり、靈剣の話が「經典」にはなく、その例がない故に記述できないとする。この一文を付すことで、例がない故に記述はしないが、作者の仏教への関心が伺える。

類似した記述は、他の巻、巻十八「鏡」の冒頭話にもあり、

吾日本には、神道に云外、いかなる鏡有とも聞及び侍らず。すべて鏡にこそ不思議は多く侍めれ。殊仏家にたふとむところなり。

と、日本では、(教義として)「鏡」は神道と結びつくが、日本以外では仏家で尊まれ、仏教の教義と結びつくこと明記する。ここでも仏教を強く意識し、最終話の第十「諸宗鏡像譬」では、

さて我ら衆生は法華清浄の明鏡を信じて現当の悉地を成就すべし。天下今静なりし事は此明鏡に有故也。

……夫此経は三世の因果を曇なく浮べ給へる明鏡なり。

とする。また、「此経」とは、その前後の文から『法華経』を指し、『法華経』の正当性を高める。

以上のことから、『楊嶋曉筆』全体に『法華経』重視の意図があるといえる。

それでは、『楊嶋曉筆』全体の傾向はどうか。先に挙げた「表一」から、巻一、巻十九「辞分、仏語」、巻二十「同名、異名、未明」、巻二十三「雑」で、『法華経』に関する語の使用が多い。巻十九は、「辞分、仏語」の表題を付し、「辞分」では、歌語が、どのように和

歌の中で使われるかを列挙する。そこでは、『法華経』に関する語は一例もなく、『法華経』に関する語が多く見えるのは、巻の後半「仏語」の箇所である。「仏語」は第一「方便」、第二「方等」、第三「般若」、第四「法眼浄」、第五「真浄法無上」、第六「円教」の全六話である。どの説話にも、『法華経』に関する語を多く使用するが、特に、第五「真浄法無上」で、『法華経』の異名を「無上の法とも又は深奥の法とも妙法とも説れたるは」と列挙する。他の説話でも、別名で言い換えており、故に『法華経』に関する語の使用頻度が高くなる。巻二十も「同名、異名、未明」の表題が示すとおり、一の事柄を別の用語で言い換えたり、その異名を羅列する。「異名」は十五の説話から成り、末尾の四話が仏教に関係するもので、第十二「弥陀」、第十三「釈迦」、第十四「仏十号」、第十五「法華経」である。第十五「法華経」では、十七の異名を列挙する。よって、『法華経』に関する語の使用が多くなる。諸々の經典の内、『法華経』のみ異名を挙げていることは、注目すべきことと言えよう。

巻十九、二十は、異名を列挙するために、『法華経』に関する語の使用頻度が高くなるとして、特殊な巻とすれば、巻一と、巻二十三「雑」の使用頻度が極めて高い。初めと終わりが呼応しており、全体を『法華経』、その中の「法花本門」の思想で総括しようとする意図が明確であり、全体の構成を意識していることが伺える。

四、他の經典と『法華經』の扱いの違い

今まで『法華經』に関する使用例を見てきたが、『榻嶋晁筆』には他の經典名も数多く見える。それらと、『法華經』との違いは何か。それは、説話の結論として、經典の思想で総括するか、単に具体例として列挙するかの違いと言えよう。『賢愚經』や『雜譬喻經』、『西域記』などの經典名は全体でも特に多く見える。しかし、それらは説話の典名として割り注の形で明記し、異説の引用の典拠として引く。たとえば、説話の末尾で典名を明かすもの

：願は我生々に財宝を具足し遍く一切に施し、自在をなし、二莊嚴を満んとき給へり。以上西域記

(卷二・第六「戒日大王」)

委は賢愚經第九にとかれたり。(卷十「似類下」第十一「善事太子」)

又報恩經にも此説あり。(同)

と出典明記の形で引く。さらに、説話の末尾に割り注の形で全体の出典を記す。また、

或云、喜見城の中に十千の大殿あり。毘瑠璃宝閻浮檀金、白銀因陀喜宝をよび余の七宝をもて莊嚴せり。正法念經

(卷廿一「居所」第八「帝釈居所」)〔割り注〕

或云、善見城の中に殊勝の殿あり。種々の妙なる宝を以莊嚴し、諸天の宮殿を蔽す。故に殊勝殿と云と云々。彌婆論

『榻嶋晁筆』における『法華經』重視の姿勢 (小椋愛子)

(同)〔割り注〕

と、異説一つ一つの出典として並列の形で列挙する。論の根拠として挙げることが多い。

それに対し、『法華經』の場合は、その説話自体の総括として用いる。卷二、第五「阿育大王」では、この世の無常を説き、別記文で「などや法花經に、「如闇得灯、如渡得船」ととかれけるをば信じ奉らざるをや。又「離一切苦、能解一切生死の縛」ととかれたれば、信すべきは此法也。貴べき妙法なり。

と、全体の解釈を示唆する。さらに第七「常觀王」では、この王が、三宝を信じ、高僧を敬い、よく国を治めたことを述べ、別記文で

こゝに法花と申御法にこそ五十展転の隨喜の功德を八十年の布施に校量し給しか。それをもて思へば、戒日、常觀等の修福の功德、大海の一滴、妙高の一塵にも及ばざるにや。…ふかく是を信すべし。

と、『法華經』の尊さを強調する。

卷二十三「雜」の「曹娥」では、その人の果報を述べ、その末尾

此經を一念信ずる功德は五度六度乃至五十展転の授量を拜給へり。…以下続

と、総括し、經典の功德として結論づける。同卷「依小施得大罪」は、話自体は「雜譬喻經」を引くが、別記文で「哀哉、拙哉、法華の本因本果にあらざれば、皆真実ならずと云

事を不_レ知事よ。

と、全体を解釈する。また、巻九「似類上」第十二「穆王駿馬」の別記文では

法花経には、此経の御為に僧坊にまうで、しばらくも聞奉らん人は、此御徳により身を転じて上妙の象馬車をえんと説かれたれば、これらの人々もかゝる縁をや結ばせ給ひけん、ゆかし。
…以下続

と、『法華経』の功德を強調する。さらに、

又、おなじ仏の御法なれ共、仏になる道はおほからず。只法花本門にかぎれり。
(巻一第九「教起」)

法花誹謗の者おちば展転無数劫を経と法花経には説り。

(巻二十一「居所」第十一「地獄」)

…爾前迹門の心は法身よせて三身常住の旨をば説やうなれども、報応ひとり常住とはとかざる事又かくのごとし。只本門のみ三身常住とは説給へり。(巻二十三「雑」・「犯法鬼」別記文)など、他経と比較し、その優位性、正当性を強調する。「迹門」に対して「本門」を強調し、「本門」を優位とする。また、「法花本門の心」として、説話の解釈をし、総括する。『法華経』を一話の具体例として引くことはなく、その思想で説話の読みを提示する。

以上、『楊鴨晩筆』中に『法華経』以外の經典名は、数多く見えるが、その引き方は用例、具体例としての提示であり、思想を以て説話を解釈、総括する『法華経』とは位相を異にすること、『法華経』

を重視する姿勢が全体に及ぶことを確認した。

また、巻十一「知識」の、「藤原時氏」等、

…藤原時氏と申て法華信受の人なり。…或時、此御経をよみ奉る時(読点筆者)

と、『法華経』に接頭語を付し、さらに、法華信受の「時氏」に対しても尊敬表現を用いる。これも、作者の『法華経』に対する扱いが、他の經典とは異なることを端的に示しているよう。

五、全体の構想と巻一との相関

先に、『楊鴨晩筆』全体の傾向として、巻一と巻二十三、いわゆる最初と末尾の巻に『法華経』に関する語が多いことを確認した。これは巻一の論理展開と類似する。巻一、第一「戲実」は物づくしの説話である。その例を挙げる中で、たとえば、「にくき物」として「かみそりとに、そりくづのまじりたる」、「ひさうする物こふ人」などを挙げるが、その末尾を「仏計こそ方につけてにくみ思召御心はましまさね。其人命終入阿鼻獄と法花経に説給ひしは、にくませ給ふには侍らず。不信毀謗のとがをいませまします計也。」と、仏、仏教に関係した例でまとめる。この末尾を仏教で総括する方法は、巻一全体に通じ、この冒頭話は、巻一の縮図と言えよう。

その関係は、巻一と『楊鴨晩筆』全体の関係と同じである。『楊鴨晩筆』の、最初の巻と、末尾の巻に『法華経』に関する語を多く使

用していることは、全体を『法華経』の思想、仏教で統括している
と言え、まさに、巻一全体とその冒頭話、(第一話「戯夷」)の關係
と同じである。とすれば、巻一は『楊鳴暁筆』全体の縮図となつて
いると言え、とりわけ、その第一話がそれを端的に表しているの
ではないか。巻一は重要な位置を占めているといえる。『楊鳴暁筆』自
体、一見様々な説話を収め、一貫性が感じられないが、全体をまと
めようとする意識は強くあったといえよう。

六、まとめ

以上、『法華経』に関する語の使用のあり方から、仏教、『法華経』
で総括する意図が『楊鳴暁筆』全体に及ぶことを確認し、全体を総
括する意図、構想があったことを指摘した。「法花本門」を「迹門」の
対義で用い、「迹門」に対して「本門」の優位性を暗に述べる。

『楊鳴暁筆』の作者は『統扶桑拾葉集』の記述から、日信という日
蓮宗の僧ではないかと言われている⁽⁵⁾。しかし、「法花本門」にまつわ
る語が多いにもかかわらず、日蓮についての記載は全くみられな
い。このことは、非常に興味深いところである。日蓮の「本門思想」
というと、独自性が強調されるが、「荆溪大師湛然」の説を基調とし
て教理を主張したり、「智証大師円珍」など天台の口伝法門の影響を
大きく受けていると言われている⁽⁶⁾。日蓮の著作も「荆溪」などの説
を多く引く。『楊鳴暁筆』中、全体に『法華経』に関する語が「荆溪

『楊鳴暁筆』における『法華経』重視の姿勢 (小椋愛子)

云：、「大師云」、「大師は……と釈せり」、「天台では……釈せり」と
いった解釈と一語に使われることと、関連はあるのだろうか。全体
の構想を考察することは、作者、成立論にも関わる重要な問題と言
えよう。

注

- (1) 拙稿『楊鳴暁筆』説話の論理展開の方法と配列——巻一を中心に——
〔愛知淑徳大学国語国文〕28、二〇〇五年三月
- (2) 『楊鳴暁筆』引用テキストは、市古貞次校注『楊鳴暁筆』(三弥井書店
による。なお、引用に適宜、傍線を付した。
- (3) 『日本仏教史辞典』今泉淑夫 編集(吉川弘文館)一九九九年十一月第一
版第一刷発行
- 『日本仏教語辞典』岩本裕 著(平凡社)一九八八年・五月発行)、『新・佛
教辞典』中村元 監修(誠信書房、平成十一年三月増補第二十一刷発行
〈初版は昭和三十七年六月発行〉)に拠る。
- (4) 「怨念」の表題は非常に珍しい。『太平広記』、『太平御覧』にも、「怨念」
の部立はなく、また、『法苑珠林』にも、見られない。日本の類書、『塵
添壙囊鈔』、『天台名目類聚鈔』にも、例を見ない。
- (5) 巻十二「因果」の巻に、「妙法」とあるが、これは『法華経』を指すと考
えるより、「仏教の教え」という意味で、とらえた方がよいか。とすれば、
この巻も、『法華経』に関する語の用例のない巻となる。この巻は、今の
前世、今の徳の原因を説くもので、天竺、震旦の話が多い。やはり、宗
教間での仏教の優位を強調する。前世の因果を説き、全体が、仏教思想

の話である。『法華経』に関する語はないが、仏教思想の、色濃い巻といえる。

(6) 『日本古典文学大事典』伊東玉美「楊暁筆」項(明治書院)、『楊暁筆』市古貞次 校注(三弥井書店) 解説に拠る。

(7) 武覚超「日本天台と日蓮——特に本門思想について——」(『叡山学院研究紀要』7、一九八四年十一月)